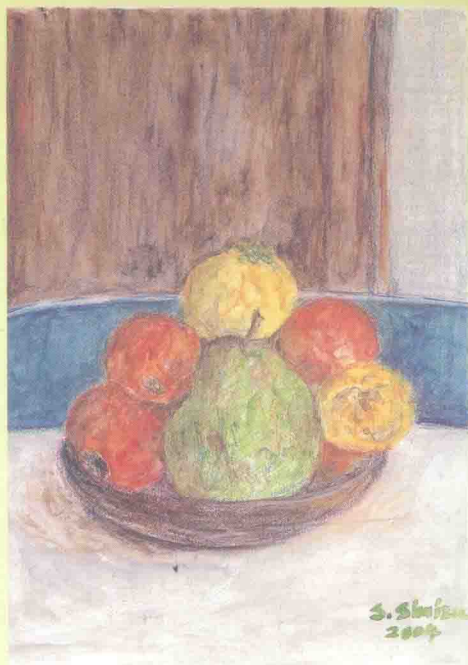


詩と呼ばれる希望

—— ルヴェルデイ、ボヌフォワ等をめぐって



清水 茂詩論集



コールサック社

詩と呼ばれる希望

—— ルヴェルデイ、ボヌフォワ等をめぐって

清水 茂詩論集



コールサック社



石炭袋

清水茂詩論集『詩と呼ばれる希望』

2014年12月5日 初版発行

著 者 清水 茂

編集・発行者 鈴木比佐雄

発行所 株式会社 コールサック社

〒173-0004 東京都板橋区板橋 2-63-4-209

電話 03-5944-3258 FAX 03-5944-3238

suzuki@coal-sack.com <http://www.coal-sack.com>

郵便振替 00180-4-741802

印刷管理 (株)コールサック社 製作部

*装画 清水 茂

*装幀デザイン 杉山静香

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN978-4-86435-179-9 C1095 ¥1500E

詩と呼ばれる希望

——ルヴェルデー、ボスフォワ等をめぐって

目次

I

詩の部屋に入るためのランプ

—— P・ルヴェルディをめぐって

墓碑銘としての詩

イヴ・ボヌフォワと象徴の問題

俳句とハイク

場と創造行為との関係について

II

イメージ、イデー、ことば

時代の危機と詩の課題

存在と詩のことば

詩の時間・詩の空間

「言葉の記憶」に「希望」を託す人 鈴木比佐雄

あとがき

略歴

240

222

206

186

152

100

70

46

26

8

254

252

詩と呼ばれる希望

——ルヴェルデー、ボスフォワ等をめぐって

目次

I

詩の部屋に入るためのランプ

—— P・ルヴェルディをめぐって

墓碑銘としての詩

イヴ・ボヌフォワと象徴の問題

俳句とハイク

場と創造行為との関係について

II

イメージ、イデー、ことば

時代の危機と詩の課題

存在と詩のことば

詩の時間・詩の空間

「言葉の記憶」に「希望」を託す人 鈴木比佐雄

あとがき

略歴

240

222

206

186

152

100

70

46

26

8

254

252

詩と呼ばれる希望

——ルヴェルデイ、ボスフオー等をめぐって

清水茂詩論集

I

詩の部屋に入るためのランプ

—— P・ルヴェルディをめぐって

二十世紀フランスの詩人ピエール・ルヴェルディ *Pierre Reverdy* のもっとも初期の詩集の一つである『屋根のスレート』 (*Les ardoises du toit, 1918*) は、私にとって、何かの折に立ち戻ってゆきたくなる詩集の一冊である。そこではことばが、しばしば、ぎりぎりのところまで単純化されている。幾ぶんかは当時の批評が彼に与えた「キュービズム的詩人」という名称（詩人はこの名称を冠されることを好まなかったようだ）の示唆するものが、その意図には潜んでいるのかもしれないが、おそらく、それよりは遙かに、ことばと沈黙との関係の深さを想起させるものとして、詩篇のそれぞれが大きな空白のなかに浮び出てくるかのような語の配列、のちのデュ・ブーシェ *Du Bouchet* などをも連想させるところのある語の配列をみせている。そして、そのことによつて、当時、この詩人が詩に期待していたものが何なのかが、幾ぶんかは理解されるように思われる。語の数かずが浮び出てくる背後には、大きな沈黙のひろがりがあるが、この沈黙とは一種の深みであり、謂わば不可視なもの、語り得ないものの潜む領域なのかもしれない、と。

たとえば「秘密」という詩篇、――

虚ろな鐘

死んだ鳥たち

すべてが眠っている家のなかでは

夜の九時

大地はじつと動かない

まるで誰かが溜息をついているみたいだ

樹々は微笑しているかのようだ

一枚ずつの葉の端で水が揺えている

雲が夜を横切つてゆく

扉のまえで一人の男がうたっている

音もなく窓が開く

この詩のなかで、標題の「秘密」は読後なお秘密のままであり、それは散文的に解き明されることがない。幾つかの事物や動作を指示する語によつて整えられてゆくのは、詩としての場の空気、または雰囲気のようなもので、それはしだいに切迫感を増してゆく。そして、最後に「一人の男がうたっている」という語句によつて、闇のなかに影絵が浮び出てくる。男は何を、何故そこでうたっているのか。一瞬、モーツァルトが夜のなかに登場させたドン・ジョヴァンニの姿に重なるが、おそらく、それとは正反對のものかもしれない。そして、それに応えて窓を開くのは、誰なのか。周囲では、あらゆるものが深い静寂のなかに依然として身を潜めているのが感じられる。だが、この静寂は安らぎのほうへ傾くことはなく、むしろ魂のなかに不安の密度を濃くすることに作用するかのようだ。十六世紀スペインのあの宗教詩人の「暗夜」(noche obscura)にかすかな連想が及ぶのは不自然なことであろうか。

あるいは、また、「忍耐」と題するこんな詩篇、――

立ちのぼった声が地平で顫えている

林間の空き地ですべては静かだ

轍のないこの道を

往く人たちの過ぎてゆくのが見えそうだ

見知らぬあの男は何処から来たのか

人びとは内部を凝視める

見えない手の上に

置かれる もっと生きている手

語の数かずは音よりも重く

それは落ちる

瞼がまたたく

あの低い語調で語られたのだ

そして べつの新しい星が上り

希望が煌く

扉が動く

真向いの樹が身を傾けた

壁は無限につづいている

私の頭のなかには、はつきりしたものは何もない

暗く かすかにひかっている舗道の上で

いつも同じ人が立ち止る

この詩篇にも、不安めいたものの漂う空気がある。地平や道、星や扉など、詩のなかに捉えられ

たすべてのものが、解き明しがたい一つの意味へと凝縮してゆくのが感じられる。その意味は依然として不明のままだが、不可視な中心としての位置を占めており、あれこれの事物は、日常的な空間におけるのとは別種の秩序を、謂わば詩の磁場に置かれたものとしての秩序を整えているかのようだ。何かしら待機とでもいう状態。

さらに、「出発」という詩、――

地平線が傾く

日々がいつそう良くなる

旅

籠のなかで一つの心が飛び上がる

一羽の鳥がうたう

鳥はほどなく死ぬだろう

べつの扉がほどなく開くだろう

星がひとつ

灯っている

廊下の奥には

栗色の髪の子